



島の宝

「何年ぶりになるかな」そんなことを考えながら少し荒れた海を進むフェリーの窓から外を見ていると姫島が見えてきた。今日は島で婦人会活動をされている皆さんの取り組みを見学させていただく日だ。上陸すると、キツネがプリントされたそろいのTシャツに身を包んだ婦人会

の皆さんが出迎えてくれた。「よう来たねえ、揺れたじゃろ」「寒いけん、お茶飲みよ」「昨日はもっと揺れたんよ」。皆が一斉に声を掛けてくれるので「ありがとうございます。今日はよろしくお願いします」と返すのが精いっぱいな僕だが、何だか実家に帰省したような気分になり、早速心が温まった。

彼女らは島の伝統料理を守るために定期的に集まり、勉強会を重ね、小中学生に料理を振る舞うこともあるという。文字にすると簡単だが、実際には並大抵ではないはず。きっとご苦労も多いだろうと勝手な思いを巡

らせながら拝見していたのだが、調理室では笑い声と話し声が絶えない。全ての人がしゃべっている。

料理のことはもちろんだが、社会情勢や身近な出来事、家族のことなど内容はさまざまに尽きることがない。何より本当に皆が楽しそうだ。その光景に圧倒され、ぼうぜんとしていると「あんた、でけたで！」という声とともに出てきたのが、かんころ餅とひじき煮。「食べてみちよくれ」と言われ、いただく、「うまい！」と思わず声に出してしまったほどの出来栄え。本当においしかった。確か

にこれは未来に残すべき味だと思った。

そして、もう一つ思ったことがある。料理をする彼女らを見て、ガスも、そろいのTシャツもなかった昔も同じようにワイワイと楽しそうに集まって料理を作る島の女性たちがいて、同様の楽しい空気が流れていたのだろうと。この営みも未来に残さなければならない大切な宝なのだ。これが島の文化なのだと思えた気がした。

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。